

非認知能力を育てるキリスト教主義教育の可能性について（第4報）

前田美和子*, 加藤 美帆**, 榎崎久美子***, 田中 沙織****

(2019年11月29日 受理)

On the Possibility of Improving Non-Cognitive Skills as an Outcome of the Education Based on the Principles of Christianity (4th Report)

Miwako MAEDA*, Miho KATO**, Kumiko NARAZAKI***, Saori TANAKA****

The purpose of this study, the fourth report of a continuing research, is to clarify the educational effects that students have gained universally through the Christian education program as a measure to obtain suggestions about the possible role of education based on the principles of Christianity may have on the growth of an active learner. Text mining was performed on comment cards for the first and second half of fiscal 2018 (April-July period and October-January period, once a week, 30 times in total), the first year of the reorganization, as a research method for this report, which is the fourth year report. As a result, we confirmed that changes in comments due to the department reorganization were not significant. Also, through the program, it was suggested that social skills derived from self-recognition from non-cognitive skills such as “self”, “feel”, and “think” are acquired. In other words, acquisition of a relationship with the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology’s “power for learning/humanity” was suggested. In the future, we will continue our research with consideration of analysis methods, including comment data for the fall semester of 2017, relations with lecture content, and additional surveys by alumni.

Keywords: Non-Cognitive skills 非認知能力, Christian Education キリスト教主義教育, Text Mining テキストマイニング

1. はじめに

近年、学習指導要領の改訂をはじめ、学校教育が大きく変わろうとしている。変化の激しい時代を生きる子どもたちが社会の中で活躍できる資質・能力を育成することを目指し、教育改革を求められているが、大学を取り巻く環境もまた急激に変わりつつある。これまでのように一般的な目標を掲げているだけでは不十分で、大学のミッションや目標をどのように達成するのかということについて、学生の経験的理解につなげていくのが問われている。このことは、大学入試改革や高等教育改革にも如実に反映されているが、一方向的な知識伝達型の学習により受動的な学びから、学生が主体となって、考

え、心を動かし、行動に移すことによって、能動的な学習者を育てることが目指されている。

本学もそういった背景を受け、2018年度に「女性の生」を、もっと豊かに」を掲げ、全学改組を行った。女性が自らの人生をマネジメントしていく責任と力が必要であるとし、女性として、豊かな人生を作る力を育てるために、生涯のあらゆるステージをキャリアととらえる「ライフキャリア」を軸とした改組である。学科の編成については後述するが、ライフキャリア教育を掲げ、4つの科目群を履修し、また様々な活動を通して自らの世界を広げながら成長させるカリキュラムを始動した。4つの科目群や活動の1つ目は「自分を知る」という女性の歴史、ライフスタイル、文学などを通して幅広く女性の人生を知ることにより、客観的に自分を見つめる科目群や活動である。2つ目には「他者と関わる」という対人関係を築く心理学や、家族を支える食と健康、子育てに

* 広島女学院大学共通教育部門准教授

** 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科准教授

*** 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科准教授

**** 九州産業大学人間科学部子ども教育学科准教授

伴う環境の変化など、多角的に人とかかわりを分析する科目群や活動である。3つ目は「社会と関わる」という学内で学ぶ理論と学外での実体験を通して、地域や企業の中で、社会の一員としてどう貢献できるかを模索する科目群や活動である。そして4つ目は「人生を描く」という自分のこれからの人生を具体的にシミュレートし、目標設定と現状の把握を通して、課題解決のための行動について考える科目群や活動である。このように時代に応じて変わりながら、キリスト教主義教育も普遍的な大学の大きな特色としている。よってライフキャリア教育の中には学生を取り巻く環境や社会に対する視野を拡げ、能動的に自己と向き合う場としてのキリスト教主義教育に関わる科目も配置されており、「ぶれない個・人格・自己」の確立を目指している。

本研究は、第1報、第2報、第3報に続く継続研究の報告である。これまでの継続研究は、キリスト教主義大学において、礼拝形式で行われる教育活動がもつ教育的意義を明らかにすることを目的として行ってきた。具体的には、本学の礼拝形式プログラムの「キリスト教の時間」（いわゆるチャペルの時間）を受けた学生コメントを分析することで、その教育的効果や価値を再考することであり、本学の枠を超えた大学で行うキリスト教教育全体にとって有用な示唆を与えるものと期待した。

第1報では、IQや学力テストで計測される認知能力とは違い、人間の気質や性格的な特徴のようなものを指す非認知能力は、成人後まで可鍛性のあるものも多く存在する（中室、2012）ことから、「キリスト教の時間」後に書かれたコメントカードの自由記述を、テキストマイニングによって非認知能力を軸として分析した。その結果、自らの自己認識や社会的適性の獲得、意欲向上、創造性、メタ認知ストラテジーといった非認知能力を育成する可能性が示唆された^{注1)}。

さらに第2報では、同様の手法で研究を行い、ノンクリスチャンがほとんどである初年次の学生にとって、キリスト教教育が人間力を育成する可能性が示唆された。また、これまで本学で伝統的に行われている全学的な取り組みでありながら、それぞれの学科の専門性によって異なった教育効果があることも明らかとなった^{注2)}。

第3報では、2018年前期^{注3)}開講授業「キリスト教入門Ⅰ」受講者に対して行われたアンケートの結果、これまでの分析でも出てきた、知識的なことより自分自身で考え、受け止め、今後活かそうとする能力が「キリスト教の時間」で身につくそうだと受け止めていることが裏付けられた^{注4)}。

これらを踏まえ、2018年度は学部学科の再編が行われ

たが、この過程を経ても尚、プログラムを通して学生たちが普遍的に得ているものはあるのか、またもし得ているとするならば、具体的にどのような教育効果があるのかを明らかにすることにより、能動的学習者としての育ちにキリスト教主義教育が果たしうる役割についての示唆を得ることが本研究の目的である。

あわせて、4年目の報告となるため、改組元年である2018年度前期・後期のコメントカードの分析と4年間の報告を振り返りながら、研究手法の成果と限界についても再考を行いたい。

2. 各学科の特徴について

前述したとおり、本研究は第3報までで2016年度春学期・秋学期、2017年度春学期のコメントカードの分析を行ってきた。研究を進めるにあたり、2018年度には全学で学科改組があり、このことにより、学科別にコメントカードを分析した際、これまでの結果と変容している可能性が考えられたため、2018年度の「キリスト教の時間」のコメントカードの分析を今年度は取り掛かることとした。そこで既に第2報において本学の各学科の特徴について述べてはいるが、ここで改めての本学の新学科について述べたい。

本学は改組前まで、国際教養学部国際教養学科、人間生活学部生活デザイン・建築学科、管理栄養学科、幼児教育心理学科の2学部4学科で構成されていた。しかし改組により人文学部国際英語学科、日本文化学科、人間生活学部生活デザイン学科、管理栄養学科、児童教育学科の2学部5学科となった。

本学の『Curriculum Book 2019』によると、国際英語学科は英米を中心とした英語圏の文化を多面的に分析し理解するとともに、自国の文化の特質を捉えなおすことで、国際社会における出来事を的確に把握する力を習得させることを目指し、その上で、英語を用いてグローバルな観点から自己の考えや意見を伝えるときに、積極的に行動することができる力を習得させることを目的とした学科である。

日本文化学科は日本固有の文化や伝統を尊び、多角的に理解を深めることによって、次世代へその特徴や意義を発展させていくことができ、世界の中の日本、世界の中の自己という視点を身に着けることによって、国際社会のニーズを的確に察知し、専門的知見や技能を活かしながら積極的に行動することができる力を習得させることを目的とした学科である。

人間生活学部のうち生活デザイン学科は生活環境・生活空間に関わることができ、人々の生活や価値観の多様

性を理解し、生活を構成する事象を多面的に捉えることができる力を習得させる。また、幅広い学問の知識を融合して、オリジナルな感性から地域資源を発掘し、地域を創造する発想力、グローバルな視点から地域社会が固有に持つ特性を理解し、活性化に向けた計画を生み出し得る力を習得させることを目的としている。さらに、一極集中の現代において、各個人が置かれた地域でそれぞれの能力を活かして、生涯を通して具体的に貢献できる力を習得させることも目的としている。

管理栄養学科は健康増進、健康障害の治療・再発防止等に係る食の知識を深め、対象にあわせた食事管理を行う能力を習得させる。あわせてライフステージ・ライフスタイル、疾病による人体の変化を理解し、対象に合わせた栄養・健康管理を実践できる能力を習得させる。さらに、倫理観を持って、円滑なコミュニケーションを図りながら、対象者の生活の質の向上に貢献できる能力を習得させることを目的としている。この学科は学科改組前と大きな変化がない。

児童教育学科は人間の心理の発達過程や多様性を理解し、子どもと子どもを取り巻く人や自己の価値観・生き方、文化的背景の多様性を受容し、寛容の精神をもって子どもの生活支援、発達支援、学習支援を行うための具体的方法を構想できる力を習得させること。および、子どもの遊びや生活、学びを支援できる知識・技能と表現力、コミュニケーション力を身に付け、家庭・地域社会において子育て支援を行うための実践力を習得させることを目的としている。

以上を踏まえたうえで、コメントカードの分析を行う。

3. 研究目的及び方法

本研究では、これまでの一連の研究をふまえて、2018年度中の「キリスト教の時間」各回において提出されたコメントカードの内容について、KH Corder (ver.2.00f) を用いてテキストマイニングを行った。「キリスト教の時間」は2018年4月～7月までの期間および10月～1月までの期間で、毎週1回、計30回行われた^{注5)}。前報同様、本研究においても、共同研究者で協議の上、記載内容の恣意的改変とならないよう十分に留意した上で、誤字・脱字が明白であるものについては正しい表記に改めた他、同義・類義の語についても頻度の高い語や表記に統一するなど、精緻なデータクリーニングを施した上で分析を行った。なお、2018年度後期第12回についてはコメントカードの原本に紛失があったため、分析からは除いている。

これまでは半期ごとのコメントについて分析を行って

きたが、本研究では、前期・後期あわせての分析を行うことにより、一年にわたる期間の中で学生が受け取っているものの内容を記述し、「キリスト教の時間」の教育的効果、すなわち、本学におけるキリスト教主義教育を通して育まれていると考えられる資質・能力について示すとともに、今後の研究の方向性への示唆を得たい。

4. 結果及び考察

各回内容及び出席者数と提出されたコメント数、割合を表1、表2に示した（表1、表2）。講話のテーマとしては、2016年度、2017年度と大きな変化はなく、前期には「賛美歌を歌おう」から始まり、主題解説、本学の校母ゲーンズ先生の生涯に触れるゲーンズ記念礼拝、沖縄「慰霊の日」、原爆講座、学生活動報告などが継続的なテーマとして挙げられる。後期も「賛美歌を歌おう」に始まり、創立記念日が10月1日であることからその前後に行われる創立記念礼拝、主題解説、東区連携健康講座、学生活動報告、児童教育学科^{注6)}1年生による「こどもさんびかをうたいましょう」、人権週間プログラム、本学同窓生からのメッセージ、クリスマス記念礼拝、卒業学年生の感話が共通するテーマとして挙げられる。そのほかの回も視野を広げ考え、行動できるようなキリスト教の基盤に立つ女性教育、平和と人権教育、情操教育等を含む総合的教養・人格教育を目指した内容、講師による講話である^{注7)}。

2018年度の特徴を鑑みると、これまでにないコメント率の低さが挙げられる。2016年春学期、秋学期、2017年度春学期の全体コメント率が30%、32.4%、72%だったことに對し、2018年度は前期13%、後期9%とかなり少ないことが見て取れる。出席率はどの年度、学期も80%前後と大きな差はないにもかかわらず、また、2017年度からコメントカードの記入を促進するような声かけ、時間を取るなどを行っている背景があるのだが、2018年度生はとにかくコメントを書かないということが特徴的であった。背景にはICT教育などの一般化、スマートフォンの普及による手書きへの苦手意識があることも考えられる。

少ないコメントながらも、2018年度前期で最もコメント率が高かったのは第3回前期主題解説「成長する自由」(28%)、次いで第6回「アフリカで生きる～ケニアのスラム街で出会った命の輝き～」(17%)と第12回「出る釘は打たれる？出すぎてしまえば打たれない」(17%)であった。2016年度、2017年度の春学期も主題解説のコメント率が最多コメント率であり、1年生が本学のキリスト教主義教育に触れ、自分の生活とキリスト教主義教育

表 1 各学科の「キリスト教の時間」出席者数およびコメント率等（2018年前期）

回	内容	児童教育学科 (含幼児教育心理学科)						国際英語学科						日本文化学科						国際教養学科						生活デザイン学科 (含生活デザイン・建築学科)						管理栄養学科						合計																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
		1年生 (82名) の出席			コメント			1年生 (89名) の出席			コメント			1年生 (46名) の出席			コメント			全体の出席 (342名)			コメント			全体の出席 (249名)			1年生 (91名) の出席			全体の出席 (306名)			1年生 (84名) の出席			全体の出席 (1355名) ※2018.5.1 現在			1年生 (392名) の出席			コメント																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
		数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率

表2 各学科の「キリスト教の時間」出席者数およびコメント率等 (2018年後期)

[illegible]

を結び付け、自分事にすることができている様子がうかがえる。また、第6回、第12回の講師は比較的若い女性で、身近な存在であることからコメントが書きやすかったと推察される。また、第6回の講師はアフリカで学校を創設しており、それについて児童教育学科（含幼児教育心理学科）が32%と高いコメント率であったことが影響していると考えられる。2018年度後期で最もコメント率が高かったのは第3回後期主題解説「いつも、心に装いを」と第7回「いのちの参加日」（19%）で、次いで第2回「創立記念礼拝」と第11回広島女学院大学人権週間プログラム「自分らしく生きてる今が幸せ～性同一性障害の僕が伝えたいこと～」（13%）であった。こちらも主題解説が高コメント率を出しており、主題が自身にとって身近なものであると意識している様子が感じられる。また、「いのちの参観日」については前期と同様、若い女性による講話で児童教育学科（含幼児教育心理学科）のコメント率が35%と高くなり、全体のコメント率に影響を与えている。

これらのことから、出席率について学科改組による影響はあまり考えられない。また、コメント率についても、旧学科^{注8)}と同様の傾向がうかがえると言える。

次に、テキストマイニングの結果について述べる。30,451（異なり語数は2,116）語が抽出され、このうち11,070（異なり語数は1,802）語が分析に使用された。このうち、出現回数の多い頻出語のうち10位までを表3に示した（表3）。

表3 出現回数の多い語

順位	抽出語	出現回数
1	思う	616
2	自分	200
3	知る	186
4	分かる	159
5	人	157
6	聞く	148
7	大切	126
8	お話	121
9	考える	105
10	自由	99

これまで同様、「思う」の出現回数最も多く、次いで「自分」、そして「知る」「分かる」「人」「聞く」「大切」「お話」「考える」などの語が10位までに入っていた。前報同様、「キリスト教の時間」の講話を通し、学生たちが

「自分」についての思いを致していることがうかがえる。他、「知る」「分かる」といった語の出現数が高いことから、講話で取り上げられる社会における様々な問題について目を開かれ、それらについて知り、理解を得ている様子もうかがえた。さらに、自分についてどのように思いを致しているのかに踏み込むため、「自分」「思う」の2つの語と共起している語について関連語検索を行い、10位までを示したものが表4である。各語について、その語が用いられている文脈を検索するKWICコンコーダンスも合わせて行い、その結果も踏まえつつ見ていく（表4）。

表4 「思う」および「自分」と強く関連している語

	抽出語	全文書中の 出現数	共起	Jaccard 係数
1	生きる	51	16	0.126
2	考える	91	16	0.096
3	自由	70	14	0.095
4	人	134	19	0.092
5	価値観	16	7	0.069
6	大切	118	13	0.066
7	選択	13	6	0.061
8	見る	33	7	0.059
9	知る	170	14	0.057
10	人生	25	6	0.054

まず、「生きる」「考える」「自由」「人」「価値観」という語が5位までにあがっていることから、「キリスト教の時間」における様々な立場にある講師の話聞き、講師やそれにまつわる方々の様々な社会貢献活動や、信念をもった生き方、社会の様々な問題についての考え等に触れることにより、生きることについて考え、これまで自身がもっていた自由や人についての信念や、価値観などに思いを馳せ、見つめ直している姿がうかがえる。また、続く、「大切」「選択」「見る」「知る」「人生」からも、社会の中にある様々な課題や問題に自らも目を向け、今まさに活動に取り組んでいる人々やについて知ることの大切さや、自分自身の選択や、自らの人生について考え、思いを深くしている様子がうかがえた。

なお、改組によって各学科のアドミッションポリシーが変わることにより、入学生の特性や傾向が変化し、学生の受け止め方にも変化が生じる可能性も想定されていたが、この結果は、学生の受け止め方には大きな変化はない可能性を示唆している。この結果には、改組前の入

学生である2年生以上の参加者のコメントも含まれていることが関係しているかもしれない。しかし本来、「キリスト教の時間」を通した学びの根幹をなすものは、学部・学科によらず社会の中で生きる者として共通して大切だと考えられる資質・能力の醸成であるため、改組による影響もそれほど大きくないことが予想されるが、この結果は、それを支持するものであったと言える。

次に、各学科の特徴について明らかにするため、各学科について、文単位で特徴的に共起している特徴語を集計した。各学科で抽出された語のうち、それぞれ10位までを示したものが表5である。各語について、その語が用いられている文脈を検索するKWICコンコーダンスも合わせて行い、その結果も踏まえつつ見ていく（表5）。

まず、児童教育学科および幼児教育心理学科以外の学科では、10位以内に共通して「自由」があがっており、ほとんどの学科で、前期の主題を通して深く考える機会となっていた可能性がうかがえた。

幼児教育心理学科・児童教育学科は、改組前後での学生の特徴の違いは大きくないものと考えられ、保育・教育の視点から「大切」や「良い」など価値的観点で受け止めている傾向もうかがえた。

国際英語学科は、その「国際共通語としての実践的な英語力を身につけ、多文化への理解と柔軟な対応を兼ね備え、自国の文化をも理解した上で、グローバル社会で活躍する人材」の育成に注力しているが、「歌」や「ギター」など文化の違いを越えて人の心に訴えかけられるものへの注目もうかがえた。また、日本文化学科は、そのアドミッションポリシーによれば「日本語や日本の文学・文化を深く理解し、日本の文化を世界に発信する力を語学教育や異文化コミュニケーション教育などにより育み、地域やグローバル社会に貢献できる人材」の育成に注力しているが、「自分」「人生」「生きる」などの特徴語にうかがえるように、内なるものの充実をベースとして外界とかわっていかうとする傾向がうかがえた。また、これらの学科の改組前の「国際教養学科」の特徴語と傾向にやや違いも見られたことから、今後数年にわたっての追跡を経なければ結論づけることはできないが、改組によって学生の特徴が変わり、受け取るものにも変化が生じた可能性も示唆された。また、生活デザイン学科以外の5学科では、全て「思う」という語が特徴語の1位にあがっていたが、生活デザイン学科では「感じる」が1位となっており、「思う」は特徴語として抽出されなかった。このことから、他学科の学生が思ったこととして感想を述べる傾向があるのに対し、生活デザイン学科の学生は感じたこととして感想を述べる傾向があ

表5-1 児童教育学科・幼児教育心理学科の特徴語

	抽出語	Jaccard 係数
1	思う	.221
2	自分	.100
3	分かる	.100
4	人	.098
5	知る	.090
6	大切	.089
7	聞く	.080
8	お話	.060
9	良い	.050
10	広島女学院	.045

表5-2 国際英語学科の特徴語

	抽出語	Jaccard 係数
1	思う	.076
2	自由	.048
3	心	.047
4	話	.046
5	楽しい	.040
6	今	.040
7	歌	.037
8	ギター	.036
9	聞ける	.034
10	面白い	.032

表5-3 日本文化学科の特徴語

	抽出語	Jaccard 係数
1	思う	.083
2	自分	.063
3	考える	.057
4	お話	.056
5	自由	.055
6	生きる	.039
7	人生	.039
8	気	.036
9	歌	.036
10	楽しい	.033

ることがうかがえた。また、デザイン学科のアドミッションポリシーから、「地域・生活に関わる知識・技能を用いて、豊かな生活を創造する発想力を持ち、人々の生活や価値観の多様性を理解し、地域・生活環境を構成する事象を多面的に捉え、よりよい暮らしを提案することが出来る人材を養成」することを目的としていることか

表 5-4 国際教養学科の特徴語

	抽出語	Jaccard 係数
1	思う	.111
2	自分	.087
3	知る	.080
4	話	.058
5	聞く	.052
6	感じる	.052
7	大切	.052
8	教える	.047
9	今日	.039
10	見る	.038

表 5-5 生活デザイン学科の特徴語

	抽出語	Jaccard 係数
1	感じる	.074
2	聞く	.065
3	お話	.054
4	素敵	.052
5	自由	.050
6	歌う	.049
7	時間	.037
8	改めて	.036
9	怖い	.033
10	良い	.032

表 5-6 管理栄養学科の特徴語

	抽出語	Jaccard 係数
1	思う	.126
2	知る	.082
3	自由	.059
4	考える	.055
5	たくさん	.041
6	聞ける	.040
7	知れる	.040
8	改めて	.039
9	生きる	.031
10	持つ	.027

ら、他者や生活環境への想像力を持つことを大切にしていることがうかがえ、こうした傾向も、日頃から感性を重要視される学科の特性によるものである可能性が考えられた。

管理栄養学科では、改組前後で学生の特徴にほとんど変わりはないと考えられ、各回の話題について聞き、知り得た経験から、改めて思い、考える様子がうかがえた

ことから、資格の取得を目指す、安定志向で現実的な思考の傾向による可能性が考えられた。

5. まとめと今後の課題

本研究では2018年度の「キリスト教の時間」を通して学生たちが普遍的に得ているものがあるのか、あるいはキリスト教主義教育が能動的学習者としての育ちに果たしうべき役割について検討を行ってきた。それにより、次のような課題が明らかになった。

まず、2018年度生のコメント数の少なさは既に述べたとおりであるが、2018年度生は通常の授業においても手書きのレポートや課題を嫌う傾向にあることが、本研究の検討の際に話題となった。これが2018年度生のみ傾向なのか、それとも今後の学生に共通することなのかは継続的な観察が必要である。一方で、この時間が学生にどのような影響を与えているのかを知る手がかりであるコメントカードの記入がこのまま少なくなれば、テキストマイニングによる分析が難しくなることは必定である。このようにコメント数によって結果など左右されるテキストマイニングという研究手法と、その妥当性について今後検討する必要がある。

次に、キリスト教主義教育が学生たちに与える影響として、これまで「キリスト教の時間」におけるコメントカードの分析を中心に一連の検討を行ってきたが、これは学生が自ら（得たと）感じている自覚的な学びの部分に焦点をあてたものである。この点においてはある程度の知見が蓄積してきたが、今後は客観的指標等も用いながら学生が自ら意識していないレベルでの態度や行動の変化など、より深い部分にまで踏み込んだ検討が行えるよう、さらなる研究手法の工夫を行っていきたい。また、「キリスト教の時間」の出席者は主に1年生であったため、今後は上級生を対象とした調査やさらには、卒業生への追跡調査等を行うことによりキリスト教主義教育が学生らに及ぼす長期的な影響についても検討していきたいと考えている。

また、2016年度の「キリスト教の時間」より分析を行ってきたが、2017年秋学期のコメントデータの分析はまだまだ終わっていないため、今後2017年秋学期のコメントデータについても検討を行い、これまでのコメントに関するまとめや共通する講話内容との関連についても考察を行いたい。

注

- 1) 前田美和子, 加藤美帆, 檜崎久美子, 田中沙織, 「非認知能力を育てるキリスト教主義教育の可能性について」,

- 『幼児教育学科研究紀要』（3），広島女学院大学，2017年
及び中室牧子，『「学力」の経済学』，ディスカヴァー・
トゥエンティワン，2015年
- 2）前田美和子，加藤美帆，榑崎久美子，「非認知能力を育て
るキリスト教主義教育の可能性について（第2報）」，『幼
児教育心理学科研究紀要』（4），広島女学院大学，2018年
- 3）2017年度までは4月から9月までを春学期，9月から3
月までを秋学期と称していたが，2018年度より前期，後
期と変更となった。
- 4）前田美和子，加藤美帆，榑崎久美子，「非認知能力を育て
るキリスト教主義教育の可能性について（第3報）」，『広
島女学院大学人間生活学部紀要』（6），広島女学院大学，
2019年
- 5）集計にあたっては学科改組が行われ，コメントカードを
集約する宗教センターが国際英語学科，日本文化学科，
国際教養学科は単独でまとめ，生活デザイン学科は生活
デザイン・建築学科と，児童教育学科は幼児教育心理学
科と，また管理栄養学科も1年生と2年生以降の学科名
に変更がないため一緒の学科としてカード原本をまとめ
ていたため，本研究においても学科単独で集計したもの
と，新学科と旧学科が混ざった状態でコメントをまとめ
た。
- 6）2017年度までは児童教育心理学科による発表である。
- 7）広島女学院120年史編集委員会，『広島女学院この10年の
歩み』，広島女学院，2006年
- 8）2018年改組によって国際教養学科は国際英語学科と日本
文化学科に分かれ，また国際教養学科の一部教員が生活
デザイン・建築学科に組み込まれ，生活デザイン学科を
組織している。管理栄養学科は改組前後とはほとんど変化
はなく，児童教育学科は幼児教育心理学科とカリキュラ
ムや一部教員の変更があった。